

なぜ わたしが？

危機の中で生きることを読む

エリカ・シューハート著

戸川英夫 監修

山城 順 訳

砂の中の足跡

ある夜 夢を見た。

砂浜を歩いていると

主が私のそばにいた。

ふり返ると

浜辺には、私自身のものと主の足跡の二組の足跡があった。

それは、はるかかなたから歩いてきた二人の足跡であった。

また、それは

私が生きてきた道であって、

私の人生を映し出していた。

ところが、不思議なことに

ところどころでは砂の中に

一筋の足跡だけが残されていた。

まさに、それはいずれも私が苦しみに打ちひしがれていた頃のことであった。

私は驚いて、主を呼んだ。

神よ、私があなたに従うと言った時、
あなたはどんな時でも私と共にいると
約束されたではありませんか。

それなのに、私が悲嘆にくれていた時には、
一筋の足跡しか残されていません。

私が最もあなたを必要としていた時、
あなたが私を一人きりにされたのはなぜですか。

すると神は、私に答えられた。

「あなたは、私の最愛の子である。

私はあなたを一人にはしない。

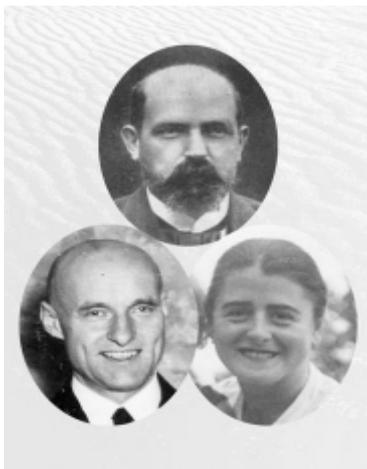
苦しみ、惑い、分からなくなっていた時、

あなたはそこに一筋の足跡だけを目にするが

それは私があなたを背負っていたからである。」

マーガレット・フィッシュベック・パワーズ

本書を私の妹アネリー・シュテークマン(旧姓シューハート)(1944年3月12日-1983年8月14日)に捧げる。彼女は悲劇的な事故により子どものトルステン、ターニャ、クリスティアンと夫ウルリッヒと共に亡くなった。



私の祖父である牧師、ヘルマン・シューハート博士(1868-1923)を敬意と謝意をもって記念する。彼は障害者、病人、また社会から拒絶された人たちのために、今日では100年の歴史を持つ「丘の上の神の町」であるディアコニーセンター・ヘパタをカッセル近郊のトレイザに創立し、ヘッセン州ではじめての生涯教育のための協会を設立した。そして、わたしが手本としてきた両親、カール・シューハート(1894-1972)とエルナ・シューハート(1906-1988)に敬意と感謝をささげる。

なぜ
わたしが？

危機の中で生きぬくことを学ぶ

目次

詩 砂の中の足跡 マーガレット・フィッシュベック・パワーズ (2)

謝辞 (4)

目次 (5)

凡例 (8)

日独友好一五一年へのご挨拶 三年後に日本人の手に渡った一冊の本 (9)

危機の中で生きることを読む 12版と11版の改訂増補・記念出版のための序文 (13)

らせん たましいの旅のシンボル (18)

第1章 被害者と家族の経験 1

第2章 八つのらせん局面からなる危機対処の学習プロセス 18

1 図版 伝記のデータ 42

2 パール・S・バックの危機対処 「母よ嘆くなかれ」の事例研究 48

第3章 生活のなかのケアと信仰 59

1 ルイゼ・ハーベル 「階段をのけて！」 小児まひによる被害 59

2 イングリット・ウエーバー・ガスト 「あなたがわたしの不安から

逃げなかつたので」 うつによる被害 73

3 ジャック・リュセラノ 「とり戻した光」 「人生は今日始まる」

失明と政治的迫害による被害 86

4	ルツ・ミュラー「ガルン」「あなたをわたしの手で支えている」	
	シルヴィアとアルベルト・グレス「知的障害をもつ子どもと生きる」	
	子どもの知的障害による被害	100
5	ローレル・リー「火の中を歩いても焼かれず」	
	がん、離別、死の宣告による被害	115
第4章	被害者の問題としてのケアをする人	128
第5章	苦しみと苦しむ能力についての神学的展開	150
1	ハンス・キユンク「神と苦しみ」	152
2	ドロテー・ゼレ「苦しみ」	160
3	A・M・K・ミュラー「苦しみの意味について」行為者のドグマの崩壊	171
4	ギースベルト・グレシャーク「愛の代価」苦しみについて考える	176
5	神学を考え問う	185
	要約	189
	注（訳者注）	201
	補遺	218
	あとがき・著者	231
	訳者	233
	著者・監修者・訳者略歴	235

凡例

1 本書は下記の本文（一―一八四頁）および序文、補遺とあとがきの翻訳である。

Warum gerade ich? Leben lernen in Krisen Erika Schuchardt 12. Auflage

Vandenhoeck & Ruprecht, 2006 ISBN 978-3-525-62370-1

2 原本のイタリックは標準体にした。

3 原本に引用された本の頁を（ ）に記した。和訳された本の頁を「 」に記した。

4 訳者による説明を「 」に記し、訳者注を * で記し、巻末に加えた。

5 引用聖句については日本聖書協会「新共同訳」および「口語訳聖書」を用いた。

6 原著には著者の研究のもととなった「一世紀の二千冊を上回る文献の一覧が掲載されており、危機の種類、また、記述者の立場」ごとに整理されている。本書ではこれを割愛している。その詳細に興味をもたれる読者は原著一七一頁以下の文献一覧A、および一八七―三二一頁の文献分析Bを参照されたい。また次のインターネットで見ることが出来る。

A http://www.die-bonn.de/esprid/dokumente/doc-2003/schuchardt03_01-ktjb1.pdf

B http://www.die-bonn.de/esprid/dokumente/doc-2003/schuchardt03_01-ktjb2.pdf

「なせばなる」という言葉はわたしが最初におぼえた日本語であり、また危機対処というテーマへのわたしのメッセージでもある。北は北海道から南は九州へと縦断する講演旅行で、わたしはこのメッセージで日本人の心をつかもうと努力した。古い家紋のついた伝統的な着物を身にまとい、秋の陽をあびて輝く桜井の桜の木の葉を思わせる輝くような橙色の帯を極めて、わたしが最後の講演の壇上上がった時、聴衆は、ドイツの哲学者エドムント・フッサール(1859-1938)の叡智の言葉を思い浮かべたかもしれない。彼はその生命の哲学のなかで、(結婚式や記念日、死という)それぞれの時に適した装いを、外面的にだけではなく内面的にも身につけ、新しく異なった世界に入っていくことを求めている。わたしが日本の女性のように着物を着たとき、わたしたち 日本の聴衆とわたし は、ここから互いに兄弟姉妹となった。わたしたちが生きる意味をつかもうとし、そのために、それぞれの社会の中で、また全世界の中で、わたしたちのまわりにいる人びとについて、そしてわたしたち自身についての経験を積み重ね、生き、そして はっきりと 新しく得られた認識に従って行動しようとする願望のもとにわたしたちは一つになった。

ギリシヤの哲学者アリストテレス(前384-322)は、「人間は政治的な生きものである (zoon politikon)」と言っている。人は村落共同体であれ、民族国家、共同体の共生の連帯的な共同体であれ、他者との関係のなかで存在するものである。それは生命の保証人である愛のようなものである。

この引用されることの多い生命の保証人としての愛を、わたしたちはキリスト教的ヨーロッパの視点から連帯と呼ぶことができる。政治的になつた愛が連帯である。愛が政治的になるときはガラテヤ六・二「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになる。」が当てはまる。

山城順、鎮西学院、長崎ウエスレヤン大学宗教主事の招きで、大学の学生と教員を前になせばなる」について講演する機会を与えられた。聴衆は日本が危機から脱出する道を自力で見出したことに自負をもって認識し、そのうえでさらに、それに比肩する危機からの癒しの道について興味をもって聞き入ってくれた。この道はわたしが一世紀の間の世界中の六千冊以上の伝記を通して得た研究結果として講堂の聴衆に説明したものであり、わたしがここで新しい読者に伝えたいと願っているものである。

山城氏のもとで、キリスト教の刻印を受けた（一八八一年にメソジスト教会の宣教師によつて設立された）大学において、現代社会学部の学生を前に語る機会を得たので、わたしは自分が開発した危機対処の相補的ならせん状の道について説明する際に、そのような活動のキリスト教的な伝統について留意することを求めた。

詩人ヒルデ・ドミンはそのような癒しの道を人生のらせんによつて次のように語っている。

「日々障害を負い、日々癒される」

また、日本で高い尊敬を受けているルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェンは彼の人生を「人生の十字架は音楽におけるシャープ#のようなものであり、高みに導くものである。」と総括している。

教える者と学ぶ者との印象深い対話のあと、山城氏は、彼が半年前からわたしの本「なぜわたしが？」を訳しているという贈り物でわたしを驚かせた。彼はこと細かに内容について、また用語について問い、出版の許可を得たいという希望をわたしに伝えた。このような著者の学術的研究に対する敬意とそのため^に費やした時間という大きな贈り物に対してわたしはここから感謝したい。

この本が出版される二一一年は、一八六一年に文化と貿易の協定を結び、日独交流が始まってちょうど一五一年の記念の年にあたり、わたしにはこの本が長年にわたる友好関係のしるしとなるものと思われる。

この本が多くの人にとって「なぜわたしが？」という危機から「なんのために！」「へと向かう人生のらせんのパートナー」となり、新しい行動の展望を開くことを願っている。

* 1 日本は当時のプロイセンと一八六一年一月二四日に江戸で修好通商条約を締結した。それによって日本とドイツとの公式の交流が始まった。その数年後には同様の条約が北ドイツ同盟とのあいだで結ばれ、その後、全ドイツとの関係が生まれる

(<http://www.de.emb-japan.go.jp/dt/2011>を参照)。

一九一四年に第一次世界大戦が勃発すると日本は日英同盟にもとづいてドイツに宣戦布告し、中国の山東半島にあるドイツの租借地青島を占領した。その結果、一九一七年四月から一九二一年の解放にいたるまで坂東一九五九年に大麻町、一九六七年に鳴門市に併合)の捕虜収容所に拘留された千人にのぼるドイツ軍兵士は、他に例を見ない人間的な処遇に対して、一九一八年一月に第九交響曲の日本初演を行うことで感謝の念をあらわしている。第九交響曲はそれ以来、日本で最も多く演奏される曲目となり、「ヒットチャート」にのぼり、ベートーヴェンに日本のアイコンとしての地位を与えるものとなっている。

ハノーバー／ベルリン、二一年夏

「なせばなる」という気持ちをこめて エリカ・シューハート

危機の中で生きることを書いた

12版と11版の改訂増補・記念出版のための序文

本書の初版が出版されて以来、多くの読者との交流が与えられた。また、わたしの本が広く受けいれられ、読書療法の一つとして読まれるようになったことを喜び、感謝している。この本を初版から二年目の記念出版のために改訂増補し、文献目録を拡充し、「古典的な」本を装いも新たに公刊する機会を与えていただいたことを出版社のアルント・リュプレヒト博士に感謝している。

新たな自然の胎動が冬の暗闇や厳しい寒さを追いやり始めると、だれもが春の始まりを実感する。人生の危機もまたその当事者にとって新たな始まりとなるものであるということにわたしたちは極めて困難な長期間に及ぶ徒労とも思われる探求の過程において徐々に発見してきた。

「なぜわたしが？」という嘆きは誰でも一度は口にしているであろう。けれどもその反対に、「なぜわたしではないのですか？」と考えることはまれである。

わたしたちは日常のすべてを当たり前のことのように感じているが、危機に見舞われた瞬間から、それまで静止していた石が転がり出すのである。

シジフォスが山頂まで石を運び上るといふ労苦を永遠にくり返すといふ物語は、二千年以

上も前からわたしたちを悩ましてきた。それは人間の労苦と恒常的な挫折の象徴である。けれども、わたしたちはシジフォスの神話を肯定的に解釈することもできる。石が山頂で静止したままではないということは幸運でもある。もしも石が転がり出さなければ、それはつまり停滞であり、終局を意味するからである。石をあきらめることなく、山頂に向かって転がしていくということは、一縷の望みを託した行為であり、立ちすくむことは許されず、苦難の中でも生き続けなければならないという人間としてのわたしたちの宿命を示している。シジフォスの使命は探求であり、道はそれ自身が目標である」ということを意味している。また、「わたしは道であり、真理であり、命である。」という教えも、そのことを示しているのではないだろうか？

わたしは、危機や病氣、障害で苦しんでいる人、また、死に直面している人と人生を共に体験してきた。それは、一九〇一年から今日に至るまで、世界中で出版されている伝記類に記されている六千をこえる人生を知ることであり、また、危機に見舞われている人々への日常的なケアによるものである。

そこで、苦しみにあっている人々がわたしの学問的な研究テーマともなった。苦しみに見舞われた人々の伝記類の分析を主とするわたしの研究の成果が、危機対処の学習プロセスの解明である。このプロセスは八つの局面を伴う上昇するらせんというイメージで理解されるものであり、危機の中での体験とケア、すなわち、お互いに学び合うというかけがえのない行為を改めて理解可能にするものである。困難な人生行路を、共に体験し、共に苦しみ、共

に作り上げる中で、わたしたち自身が互いの幸せを解明し、「キリストの掟」の秘儀、すなわち、他人の荷を負うということを理解することができるのである。

キリスト者も苦しみを避けて通る道は知らないが、キリストと共に歩んでいく一つの道ならば知っている。闇は神の不在なのではなく、むしろ、その中でわたしたちが忍耐し、求め、改めて神を発見する神の隠れた現存なのである。

一世紀の間の伝記類からの結論

本書は、人生の危機にあつた人たちについてこの一世紀の間に書かれた二千冊以上の文献を、がんや離別、迫害、死など危機の種類に従って整理し、それぞれに短い内容紹介を付している。読者は自分の関心によって読み進めていくことができる(217頁、図)。

苦しみにあつた人たち、また救われた人たちの体験報告は、この一世紀の間、常に増加し続けてきたが、その全体像を一一版では概観している。その展開や傾向、変容が、それによって明瞭に把握されるであろう。二世紀の最後の三分の一世紀には、このテーマで出版された本は飛躍的に増加している。二世紀のなかばに数百冊であつたものが、世紀の変わり目には六千冊を超えている。著作の動機となつた危機の様相の重点が、障害から長期の療養を必要とする病氣へと、そしてさらに離別、迫害、死亡などの人生上の危機的な出来事へと変化している。

生涯学習の促進や継続的な成人教育を制度化してきた背景には、七十年代になって、生活

上の精神的重荷について書いている人たちが急激に増加しているという状況がある。機会均等という考え方から、障害を負う人や不当な扱いを受けている人に注意が向けられるようになった。八十年代にはがんやエイズ、精神障害などの長期の療養を必要とする病気におかされた人々が発言を始めた。八十年代の半ばからは、ホロコーストの徹底の見直しが、今までのところ、主として犠牲者たちによって行われている。九十年代から世紀の変わり目にかけて、テレビ番組のトークショウやビッグ・ブラザー・カルチャーの中で、それまでタブーとされてきた問題が「告白」され、性同一性障害や性犯罪が社会的にテーマとして取り上げられるようになった。

さらに、今日の医学と遺伝子研究によると、人間の生命にかかわる全く新たな重大な意味をもつ危機的出来事の可能性が取り上げられている。(44〜48頁、図1〜図5、データ、数値、グラフィック、図版)

この展開を追っていくことは、わたしたちを魅了するものである。この作業もさほど困難ではなからう。二一世紀に文献検索システムOPAC (Open Public Access) を利用する人たちはアクセスして即座に新著を検索できるインターネットの恩恵を受けているからである。一九八七年まで、文献目録は公文書資料室で、手仕事で苦労して探さなければならなかったことを考えると非常に便利な時代になった。

子どもでも扱えるデジタル技術の情報社会、コミュニケーション社会、また娯楽社会の中にあつて、生活上の障害を負って苦しむ人たちの数は増加している。書籍というものはそれ

を書く人にとっては荷を軽くするメディアウムであり、読者にとっては助言と支援をするメディアウムとなると二つの役割をもって危機対処の役目を担うものである。そのためならなる一助として、わたしはここに八つのらせん局面からなる危機対処の学習プロセスを公表し、さらにまた、危機に見舞われた数千人の声を、そのいずれもが聞きもらされることないように収集したのである。

二 一年早春、二 六年 ハノーファー、ベルリン

エリカ・シューハート

らせん 二通りの旅のシンボル

苦しみにあつた人たちの千冊を超える生活史の研究において、多くの一致点と法則性が発見され、八つのらせん局面からなる危機対処のモデルが作成された。

わかりやすく図解するものを探しているうちに、互いに移り変わりながら昇降し、からみ合う努力のらせんのイメージへとたどり着いた。

だいぶ経ってから、わたしはそれが元型 C・G・ユングを参照 を表現していることに気づいた。人間の人生の道やたましいの旅のシンボルとしてのカタツムリや迷路、らせんなどの図像表現や建築物は大昔から存在し、今日でもその象徴的な力は失われていない。

その一例がベルリンの旧帝国議会議事堂を覆うガラスのドームのなかを昇り降りする「銀色にほのかに光る」二重らせんの、息をのむよつな美しさである。それは再統一されたドイツの象徴であり、私たちを暗い過去から引き上げ、新しい思想の光をもって照らしている。



らせん—たましいの旅のシンボル

旧帝国議会議事堂を覆うガラスのドームのなかの二重らせん Normann Forster, Berlin 1999